

1. リオ五輪の段違い平行棒決勝で15.000を出したこの演技はニュースでも何度も放送され話題を呼んだ 2. 演技終了後、会場からの声援に満面の笑みで応える由綺さん 3. 自身も体操選手だった母の玲子さんと。ずっと二人三脚で戦ってきた 4. ザ・フェスタ栄通りで報告会も行われ、陸上女子1万mに出場した日本郵政グループの関根花観さん(右)と共に、大勢の市民に祝福された



内山 由綺 1998年1月13日生 東京都町田市出身 スマイル体操クラブ所属 158cm・47kg

内山 由綺

体操選手 特集 3



2020東京。
本当の夢はそこで叶うはず——。

メダルラッシュに終わったリオの五輪。
男子団体や内村航平の2連覇に沸いた体操界だが
女子団体が1968年のメキシコ大会以来の
4位入賞という好成績を叩き出していたことも話題となった。
3位の中国との差は僅か1.632。
2020東京でのメダルは夢ではなくなった。

選手となったが、実は特定の練習場所はなく、所属クラブも形式上のものだ。母と娘、2人だけで世界に挑んできた。日本体操協会の強化指定選手に選ばれてからは、指定の施設で練習に励む。現在、週1日の休みを除き、練習は1日8時間ほど。自宅に戻るのには夜23時を過ぎ、夕食は車中で摂るのが日課となっている。

「リオでは全然緊張しなかったんです。国内だと、皆ライバルだからピリピリしちゃったりするんですが、皆で戦うっていう感じでチームの雰囲気もとても良くて。演技が終わった時はヤッター！っていう達成感でいっぱいでした。」夢だった五輪の舞台で、満足のいく演技が出来たことは、大きな自信に繋がっている。

「次の目標は、2020年の東京オリンピック。団体で3位、個人では段違い平行棒でメダル。絶対！」と元気がいっぱいに語った。2017年の春からは早稲田大学に進学し、練習環境も少し変わってきた。ただ、リオで一回り大きくなった彼女の先には、もう2020年の五輪しか見えていない。超え、負けず嫌いの彼女が挑む2回目の五輪。新たな挑戦はもう始まっていた。

小柄な日本選手の中で、頭一つ飛び抜けスラリとした容姿。それが内山由綺さんだ。特徴は長い手足を活かした美しく、そしてダイナミックな演技。得意な種目は段違い平行棒だ。リオのオリンピックでは予選の平均台と段違い平行棒に、決勝では段違い平行棒に出場した。そして初の大舞台で15.000という高得点を叩きだし、48年振りの好成績に大きく貢献した。

6歳で体操を始めた彼女にプロ意識が芽生えたのは小学6年生、全日本ジュニアで優勝した頃だった。「頑張ると目標が叶うことに気が付いた」——そう当時を振り返るが、国内のトップ選手がこぞ出て出場するNHK杯にも13歳で出場、14歳で3位入賞を果たしている。

平成10年、町田市生まれ。明るく、そして自らを「超え、負けず嫌い」と分析する。市立南中学校から都立町田総合高校に進学したが、練習環境を最優先に考え、私立帝京高校に転校、今年の春に卒業した。7月に念願のオリンピック日本代表の座を掴み取り、今は体操一色の生活を送っている。

12年間、指導してきたのは元体操選手で母親の玲子さん。着実に実力をつけ女子体操界を牽引する